

## 【研究ノート】

# 中国の山岳と宗教見聞記（その二）

〽天台山・王屋山〽

薄井俊二

## はじめに

二〇〇五年度より、科学研究費補助金を得て、中国の山岳を实地調査する機会を得た。その折の調査の概要と結果について簡略な報告をするが、本稿はその第二弾である（1）。

## I. 五台山初訪

### 一. 五台山について

#### （一）山の位置

山西省忻州市五台県の東北端。五峯の内の北台や西台は同市繁峙県にまたがる（図1「五台山とその周辺」、図2「五台山内寺院」）。

## （二）概要

一名、清凉山ともいい、仏教では、文殊菩薩の聖地として古くから信仰を集めている。

最高峰は北峰で標高三〇五八<sup>メートル</sup>。エリア内の最低部で海拔七〇〇<sup>メートル</sup>あまりとされる。現在は顯通寺等がある台懷鎮と呼ばれる地区が中心となっているが、盆地状のその地域を、五つの峰（東台望海峰、西台挂月峰、南台錦綉峰、北台叶斗峰、中台翠岩峰）が囲んでいる。この五つの峯に囲まれた地域（五台山域とも呼ぼうか）が、五台山風景区をなしている。

「水経注」の佚文によれば、西晋ごろから神仙道によって開かれていたらしい。五胡十六国時代を経て北魏時代になって、山内に寺院が建立されるようになったと思われる。

北魏は初め大同に都を構えていたのが、後に中原の洛陽に遷都する。大同から中原へ至る主たる道のひとつが、「大同から

南西に下り、雁門関を越えて代県に入り、更に南下して忻州・太原を経て中原に至る」ルートである。五台山は、このルートから、東へ入ったところに位置する。大同と中原との人の往来が盛んになっていく中で、五台山の神秘的なたずまいが仏者にも知られるようになり、仏教勢力が浸透することとなったものであろう。おそらくは忻州から東へ二〇kmあまり入った、現在は「台外」にあたる南禅寺や、そこから更に東へ進んだ仏光寺あたりが最初に作られた寺院ではないか。そして次第に東北へ進み、五台山域内の入り口にあたる清涼寺付近が開発され、更に奥に進んで、台懷鎮を中心とする現在の五台山域内へ至ったものと推測される。

やがて「華嚴經」に「東北方に菩薩の住処あり。清涼山と名づく。過去の諸菩薩、常に中に住す。彼に現に菩薩あり。文殊師利と名づく」とある、インドの東北にあるという「清涼山」こそ、この五台山であるとの認識が広まり、文殊菩薩の霊場とされるようになった。その説は海外までも及び、ついにはインドの修行僧が、ここを礼拝に訪れるまでに至った。日本の入唐僧円仁も、ここを訪れたが、初めて五台山の中台を目にしたときには「これ即ち文殊師利いたまうところの清涼山、五台の中台なり。地にひれ伏し遙かに礼すれば、覚え涙 雨のごとく降る」（『入唐求法巡礼行記』開成五年四月二十八日条）と感動の思いを表し、この地では人々は、卑賤の人を見ても軽侮の心を起こさず、驢馬を見てもそれが文殊菩薩の生まれ変わりではないかと思つて敬いの心を抱く（同五月十六日条）といっている。五台山が最も繁栄した時期には、三百以上の寺が林立してい

たといい、観音菩薩の霊場である普陀山（浙江省）、普賢菩薩の霊場である峨眉山（四川省）と並んで、中国仏教の聖地とされる。現在でも、台内に三十九カ寺、台外に八カ寺で、合計四十七カ寺の寺院が存在する。

日本の平安時代から鎌倉時代の入唐僧や入宋僧でこの山を訪れたものも多い。円仁の「入唐求法巡礼行記」<sup>(2)</sup>や成尋の「参天台五臺山記」<sup>(3)</sup>に詳しい記述がある。

なお、五台山周辺は、グーグルアースでかなり詳細な空中写真が公開されている。一見されることをお勧めする。

## 二．見聞記

### （一）目的

唐の僧侶慧祥の手になると伝えられる「清涼山伝（古清涼伝）」は、現存する山岳地理書の中で最古のもののひとつとして注目される。そこで、そこに記されている記事を現地で確認すること、当該地域の地理的な雰囲気を感じ取ることを目的として、この山を訪問地として選んだ。

あわせて、古い関所や都城といった、山西省における歴史的建築物やそれらの立地環境を調査することとした。

### （二）旅程（単独行）：二〇〇六年八月二十五日～三十日

1. 成田↓飛↓北京↓飛↓太原（太原市内泊）
2. 喬家大院・平遙古城視察（太原市内泊）
3. 太原↓雁門関↓代県↓楊忠武祠堂↓台外：仏光寺↓五台山：清涼寺・金閣寺（五台山内泊）

4. 五台山：中台演教寺・獅子窩、台懷鎮：顯通寺・菩薩頂（五台山内泊）
5. 五台山：龍泉寺・竹林寺、台外：南禪寺→太原（太原市内泊）
6. 太原→飛→北京→飛→成田

### （三）アクセス

五台山へ入るのにはいくつかのルートがある。円仁は石家荘から北上して阜平から西へ山を越えるルートで入り、南西に下って五台县經由で忻州へ抜けている。徐霞客<sup>（4）</sup>も同じルートで入り、北へ抜けて応県へ到っている。

今回は、北の代県を經由したので、代県から東へ進み、繁峙県の手前で南下して山を越え、豆村鎮という集落から東北へ転じて五台山に入った。帰路は円仁と同じく、南西に下って豆村鎮に至り、北へ曲がらずにそのまま南西に進み、五台县を経て忻州へ到るルートを取った。

### （四）見聞報告

初日は移動日。連絡の手違いで、太原空港で出迎えがおらず、ちよつと焦る。無事連絡がつき、車で太原市内に入り、書店で地図などを購入。

二日目は山西省中部の都城を視察。近年中国では歴史ブームで、明清あたりを舞台とするテレビドラマや映画が数多く作られている。そしてそれにちなむ名所も生まれており、古い町並みを残す「古鎮」等が整備され、多くの観光客が押し寄せている。山西省では、山西商人が活躍したことから、古い商人町が

観光地化している。そこには大商人の大邸宅や両替屋、廟などが残されているのだが、中でも喬家大院・王家大院などが著名である（写真1）。

また明清時代の城壁を完璧に残す平遙故城は、ユネスコの世界遺産の指定も受けており、古代中国の都市の姿を現代に伝えている（写真2・3）。幅と高さがそれぞれ十<sup>1</sup>メートルの城壁は、全長六<sup>2</sup>キロを越えており、城内には、伝統的建築物の四合院が四千戸近くも残されている。

三日目は、先ず太原市から北へ雁門関を訪ねた。ここは代県から西北へ二〇kmの地にあり、古来から要害の地とされ、日中戦争や国共内戦でも激しい戦いが繰り広げられた場所である。現在の建物は明代のもの（写真4）。

代県を経て、楊忠武祠堂を訪ねる（写真5）。ここは宋代の対遼戦争で名を轟かせた武将、楊業を祭ったもの。近年ここに立つ石碑が創立当時の元代のものであり、「楊家将」物語の形成過程の解明に大いに役立つとの見解が示されている<sup>（5）</sup>。訪問時はこのことを知らなかったので十分に調査することができなかった。

楊忠武祠あたりから、道を南に取り、峠を越えて五台县域に入る。五台县域から東北へ上ってくる道と合流するあたりが豆村鎮という集落で、その東北部に仏光寺がある（写真6）。いわゆる台外の寺院であるが、北魏の創建と伝えられる古刹で、台懷鎮の寺廟群形成以前からのものではないかと思われる。日比野丈夫氏は「仏光寺ありて、のちに五台山あり」との伝承を記している<sup>（6）</sup>。

そこから東北へ進みいよいよ五台山域に入るが、初めに会えるのが清涼寺である(写真7)。清涼山の麓にあり、靈石の伝承もあるが、日比野氏らが(6)、「仏光寺の次に清涼寺が作られ、その後に台懷鎮が開かれたのではないか」とされているところで、五台山域では早い時期の開発になると思われる。

さらに進むと金閣寺がある(写真8)。すぐ手前に「五台山域内」の改札所があり、観光客はここで入山料を支払う。金閣寺も唐代創建の古刹であるが、日本の入唐僧でありながら、その学識から「三蔵」の称を受けるほど尊崇を受けた靈仙と関わりの深い寺院であり、近年そのことを記念する石碑が建てられた。台懷鎮手前の宿に泊。

**四日目**早朝、宿の周辺を散策。穏やかで閑かな田舎のたたずまいである(写真9)。

朝食後、五台山巡りを始める。一旦台懷鎮に立ち寄り、入山料を支払う(7)。小型車に乗り換え、運転手も登山専用に交替。昨日来たルートを後戻りし、金閣寺の手前から北上する。そこからは登り道が続くが、周囲に樹木はなく、全くの裸山である。山頂はなだらかで、石がたくさん積み上げられており、賽の河原のようである(写真10・11)。

下山途中に獅子窩に寄る。その美しい景色のためたくさんの獅子が遊んでいたという伝承を持つ。有名な瑠璃塔(写真12)が修復途中であった。この他、過去の旅行記の類では「荒廃している」とされていた施設の多くが修復中・もしくは修復されていた。仏教等宗教活動の活発化や観光地化の進展の影響であろう。また、地元の僧侶が徒歩で下っていたので、同乗させる

ことにした。ところがこの僧侶、たいそう愛想が悪く、こちらが挨拶しても返事もしない。聖職者に奉仕する機会(俗人が善行を積む機会)を与えてやったとでもいうのか。

昼食後、台懷鎮の寺廟群を参観。もと大華嚴寺といった顕通寺では、信者を集めた読經の声も聞こえ、宗教施設としての隆盛の様子を伺わせた(写真13)。ラマ教寺院である菩薩頂も見学した後は、ガイドと別れて、台懷鎮南部をひとりで探訪。

**五日目**早朝、単身で龍泉寺を見学。朝食後、円仁も滞在した竹林寺を見学したのち(写真14)、五台山域を出る。南西に下り、五台县城を経て南禅寺に至る(写真15)。どっしりしたその造りは、明清時代の中国寺観とは趣を異にしており、天平奈良の寺院に通じるものがある。周囲は山西省特有の黄土層で、窑洞(ヤオトン)とおぼしき建物も少なくなかった。

**六日目**は移動日。早朝太原市内を散策し、予定通り、北京經由で帰国。

## (五) まとめ

今回の旅は、五台山を訪ねることが第一の目的であった。それに関しては、一(二)の概要で述べたような、五台山の位置関係を実感し、「南禅寺・仏光寺↓清涼寺↓台懷鎮」という、開発の方向性を確認できたことが一番の成果と言えよう。

その他、山西商人の広大な屋敷、平遙故城等、かつての都市生活を感じさせる施設を目にすることができたこと、雁門関・代県・楊忠武祠堂等、一般の日本人ではほとんど訪問することのない場所を訪ねることができたこと等貴重な成果を得ること

ができた。

また山西省代県は、前漢の文帝が即位前に治めていた場所である。前漢きつての名君とされる文帝劉恒が、どのような地理的環境の中で育ったのかに興味があった。そこは、塞外との接点である雁門関に程近く、中原から遠く離れた場所であった。その一方、代県のある忻定盆地は意外に広々としており、水量の豊かな河川が流れ、農耕に適している土地柄であることを確認できた。塞外との交易の拠点でもあったろうから、豊かな経済力を持ちうるまちであつたと推測される。若き日の文帝が過ごした王国（代国）は、確かに都からは遠く離れてはいたが、決して貧しい辺境の地ではなく、人と物資が豊富で活気のある、豊かな地方都市だったのではなからうか。

## Ⅱ. 王屋山初訪

### 一. 王屋山について

#### （一）山の位置

王屋山は、山西省と河南省の境をなす、中条山系の東端に位置し、河南省済源市済源県城の西北四十五kmにある（図3「洛陽から王屋山」）。済源市は洛陽市と黄河を挟んだ対岸に位置する。

#### （二）概要

王屋山は、古代、炎帝が雨乞いの儀式を執り行ったという伝承や「列子」の「愚公山を移す」の故事を持つが、おそらく開

発されたのは、唐代に道士司馬承禎（六四七～七三五）の道観が設けられてから後のことであろう。司馬承禎は、元もと浙江省の天台山を居に定めていたが、歴代皇帝からしばしば招聘されていた。そして玄宗皇帝に至り、都に近い王屋山に陽台宮という道観を作り、司馬承禎をそこに移らせるに至った。その後、道教の三十六洞天の第一に位置づけられるなど、重要視されることとなった。

主峰の天壇山（二七一・一）は周囲から独立しており、その麓に陽台宮がある。現在残る琉璃玉皇閣は、龍の彫像を施した石柱で有名だが、明代の重修である。

なお、済源市は埼玉県新座市と姉妹都市協定を結んでおり、毎年交流を行っている。今回の訪問に先立って、新座市教育委員会から資料提供などの援助を得た。記してお礼申し上げる。

## 二. 見聞記

### （一）目的

王屋山は、司馬承禎が天台山から移り住んだ山である。しかも、事前の調査では、彼が居たとされる陽台宮は、典型的な山麓型の道観であるように思えた。五台山等の仏教山岳と異なり、王屋山は日本では一般ではほとんど知られておらず、関連する出版物もない。そこで実地に訪ねていつてその立地環境を調べる必要であつた。

### （二）旅程（単独行）：二〇〇七年十一月二十五日～二十八日

1. 成田↓飛↓北京↓飛↓鄭州↓洛陽（洛陽市内泊）

2. 洛陽↓王屋山↓洛陽（洛陽市内泊）
3. 洛陽市内諸施設↓鄭州（鄭州市内泊）
4. 鄭州↓飛↓北京↓飛↓成田

### （三）アクセス

洛陽市から高速道路、あるいは一般道路で済源市まで出て、そこから車で西へ進む。

### （四）見聞記

初日にアクシデント。北京へ着いたところ、「霧のため鄭州行きの飛行機は飛ばない」とのこと。種々手を尽くした結果、午後十時発の便が飛ぶことが分かり、大幅な遅れで鄭州に着。洛陽のホテルへは午前二時に着となった。

二日目は、今回の訪問の目的地である王屋山へ。前日の到着が遅れたことからゆつくりと出発。済源市で現地ガイドを拾い、王屋山へ。山道に入るとトンネルで車の脱輪があり、渋滞。やがて復旧。新聞等で報じられることはあまりないようだが、交通事故はかなりの頻度で生じているらしい。

昼食後、山麓の陽台宮へ（写真16）。ここはやはり典型的な山麓型道観であった。済源市からやや登った所にあるが、周辺は平野が広がっている。そして天壇山がはじまる山麓に位置しており、山へはいる入り口、あるいは山へ登るベースキャンプの役割を果たしていたものだろう。

次いで天壇山へ（写真17）。山頂は涼しいことから、夏にはかなりの観光客が来るらしいが、時節柄、他の客は全く居らず、

山頂へ至るロープウェイは稼働すらしていなかった。ガイドの分も含め、二人分の料金を払うことで、やっと作動（8）。おそらくこの一週間くらいで我々が唯一の客だったのではないか。

二人乗りのロープウェイは、ガラス窓が無く素通しである（写真18）。虚空高く上っていく行程は、中々スリルがある。天壇山はまさに「独立」（写真19）。山頂から見渡せば、遙か彼方まで見渡せる絶景であった。ただし山頂の施設は展望台で、宗教施設ではない。その他、山麓には清代のものと思われる道観もあったが、今回は訪ねることができなかった。

三日目は洛陽市内の宗教施設等を視察。現地ガイドは、龍門石窟や白居易の墓などを予定していたようであるが、こちらの希望で変更してもらう。

まず、市内北部の古墓博物館と北魏の陵墓（写真20）。次に市内の繁華街で発掘された、周王の墓の上に作られた周王城博物館。昼食後、漢魏の洛陽故城、道観の上清宮（写真21）、後漢の光武帝の陵墓及びそれに併設されている孟津出土資料館等を視察した（写真22・23）。この資料館では、漢代や唐代の遺物が何の障壁もなく置いてあり、写真を撮ろうが手を触れようがお構いなしという状態であった。

また市内の東北部には、漢から唐代に到る古墓が随所に見られ（写真24）、それらを望見することができたことも大きな成果であった。

ただ、漢魏の故城については、再発掘中とのことで、それらしいところを見るに留まったのは残念である。

四日目は移動日で、無事に成田へ帰国した。

## (五) まとめ

今回の視察は、王屋山にしばった。事前調査が十分できず、見残したところが多々あったが、取りあえず実地に身を置くことで感じることは少なくなかった。この点は成果が大きい。しかし、王屋山周辺でも、洛陽市内においても、地図や文献資料などはあまり蒐集できなかった。

また洛陽についてだが、同じ古都の西安が様々な調査研究や観光の対象となり、多くの出版物が出ているのに対し、やや出遅れているように思われる<sup>(9)</sup>。洛陽そのものの再評価も含めて、今後研究を進める必要があるところであろう。

## 注

(1) 前稿(「中国の山岳と宗教見聞記(その一)」『埼玉大学国語教育論叢』第十一号、二〇〇七)では、二〇〇五年度に実施した、天台山と廬山への訪問記を記した。

(2) 円仁の「入唐求法巡礼行記」については左記参照。

小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』一九六四・六九、鈴木学術財団

E・O・ライシャワー『円仁 唐代中国への旅』一九八四、原書房

(3) 成尋の「参天台五台山記」については左記参照。

藤善真澄『参天台五臺山記の研究』二〇〇六、関西大学出版部

同『参天台五臺山記 上』二〇〇七、関西大学出版部

(4) 徐霞客(名は宏祖)は明代の旅行家・紀行文作家。中国各地を見聞した記録文『徐霞客遊記』十二巻がある。

(5) 松浦智子「楊家将」物語の形成過程について―山西省楊家祠堂の元碑、家譜を手がかりに―日本中国学会第六十回大会口頭発表、二〇〇八年十月十一日、京都大学。

(6) 小野勝年・日比野丈夫著『五台山』。本稿末の「五台山関係資料」参照。

(7) 五台山域内に入るときに料金を払い、更に五台山頂に登る際にも料金を払うこととなった。ガイドによれば、かつては域内へ入る時だけだったのが、今回来てみたら山頂入山料が新設されていたとのこと。

(8) 現在中国では、有資格ガイドが観光客を案内する場合、ガイド分については入場料などが免除される。

(9) 帰国後入手した次の資料は、今後の洛陽研究の出発点となりうるものであろう。

橘英範「洛陽関係邦文文献目録稿」『中国文史論叢』第三号、二〇〇七

## ●五台山関係の資料(日本での主な出版物)

○小野勝年・日比野丈夫『五臺山』一九四二、座右寶刊行会(本書は、平凡社の東洋文庫に収録された(一九九五)ことで

入手しやすくなった。しかし東洋文庫版は、日比野氏によって若干の編集がなされている。特に両氏の五台山探訪記である「五臺山紀行」の中の日中戦争に関わる記述が東洋文庫版では省かれているなど、原著でしかうかがえない部分もある。）

○斎藤忠『中国五台山竹林寺の研究』一九九八、第一書房

\*王屋山関係の資料で日本で出版されているものはない。

#### ●地図の出典

○図1、図2：『大同五台山之旅』（山西科学技術出版社、二〇〇一）より

○図3：『新篇河南省公路里程地图冊』（中国地图出版社、二〇〇七）より





図1 五台山とその周辺



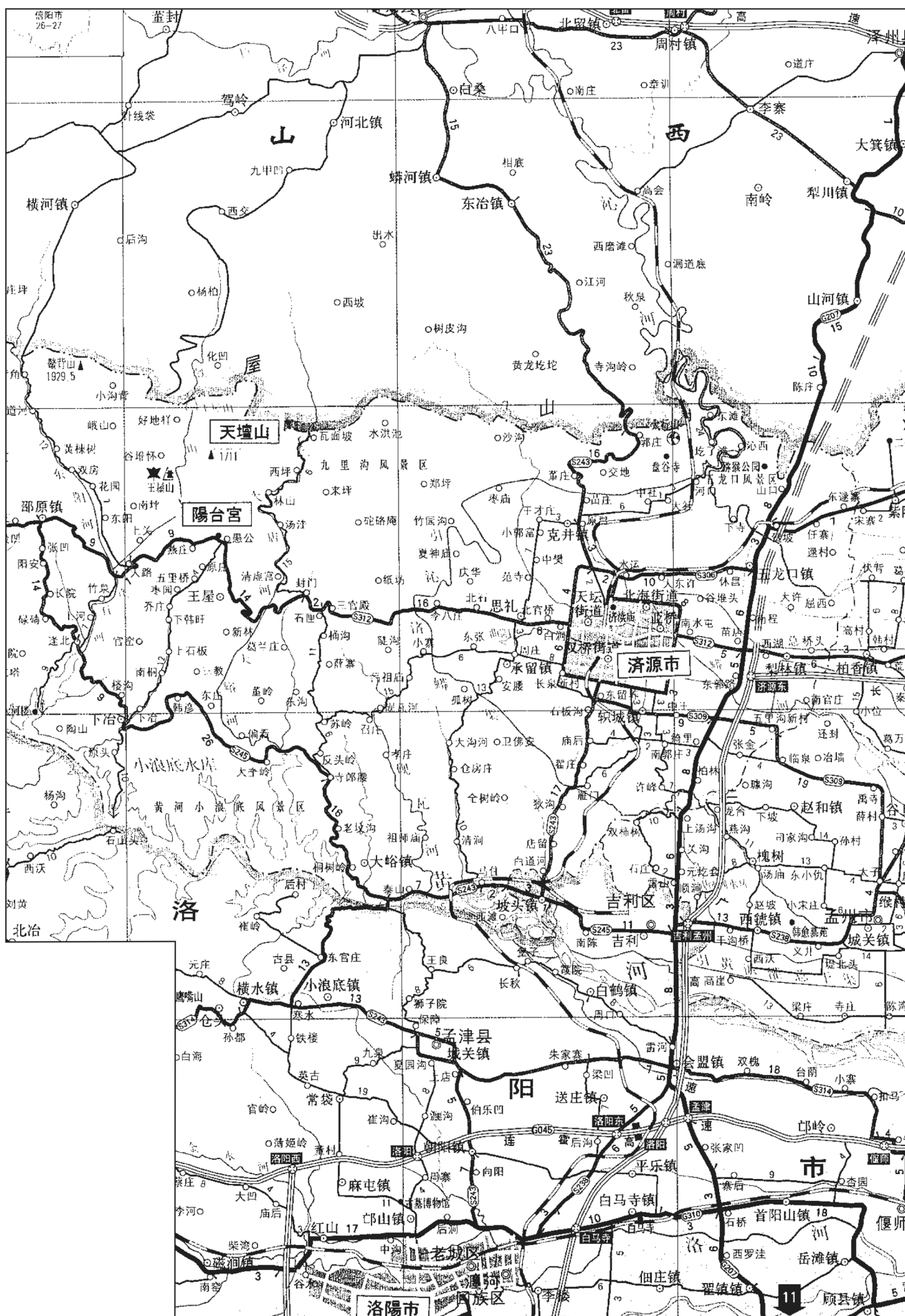


図3 洛陽から王屋山



写真1 喬家大院



写真2 平遙故城城壁



写真3 平遙故城城內



写真4  
雁門關



写真5  
楊忠武祠



写真6  
仏光寺



写真7  
清涼寺



写真8  
金閣寺から山門を見る



写真9  
五台山中の景観





写真10  
中台演教寺



写真11  
中台山頂



写真12  
獅子窩瑠璃塔



写真13  
顕通寺の仏塔



写真14  
竹林寺



写真15  
南禅寺





写真  
16 陽台宮



写真  
17 山麓から天壇山を見る

写真  
18 天壇山へのロープウェイ

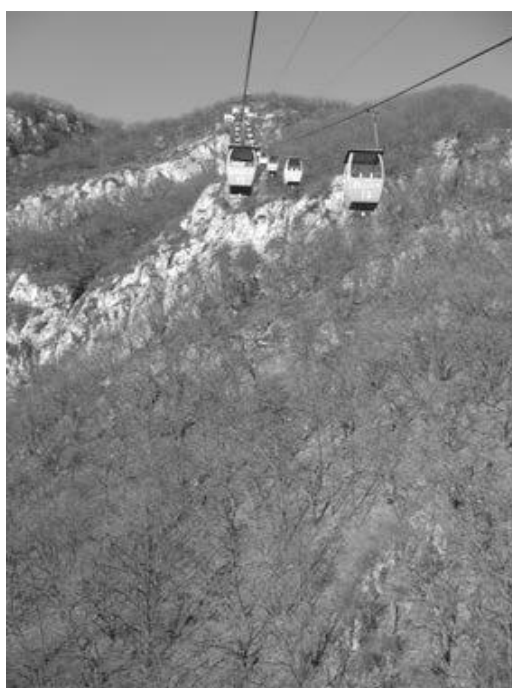


写真19 天壇山



写真20 古墓博物館内の景陵



写真21 上清宮



写真22  
光武帝陵



写真23  
孟津出土北魏石像



写真24  
洛陽北郊古墓群